

よびごえ

因速寺機関誌

VOL, 144



私たちは、亡くなられた故人とどういふ関係を結んでいるだろうか。故人は、この世を去って、独りで冥界に旅立ったと考えるだろうか。もし冥界を「寂しく、冷たく、暗い場所」だと考えているならば、それは「死者差別」である。もし故人を「可哀想だ」と感じているならば、それも「死者差別」である。なぜなら、生者はまだ「死」んだことがないからだ。自分はまだ「死」を体験していない。だから、まだ「本当の死」を知らない。生者が知っている「死」は、自分以外の二人称、三人称の「死」だ。「本当の死」を知らないのに、故人は「寂しく、冷たく、暗い」場所に旅立った「可哀想なひと」とレットテルを貼ってしまふ。何がレットテルを貼るのかと言えば、その正体は「貪欲」という貪りの心だ。「貪欲」は、自分に都合なことだけを貪る。だから、不都合の極致である「死」を徹底的に差別し排除しようとする。このカラクリを見破るのが「真・宗」である。そして「死者差別」から故人を解放してあげなければならぬ。故人は、「地獄」にも、また「極楽」にも逝ってはいない。そもそも、「地獄・極楽」といふ観念を生み出すのも貪欲の仕業だ。このカラクリを見破り、貪欲の魔の手から故人を解放してあげなければならぬ。

愛楽仏法味

武田 釋定光（住持職）
しやくじようこう

■人生の楽しみ■

小生も、今年で七十二歳になろうとしています。若い頃は、「死」など、ずっと先のことだと思っていましたが、どうも差し迫ってきているようです。とは言うものの、それほど深刻に受け止めているわけでもありません。

それで、近頃、思うのは、「人生の楽しみ」って何だろうということなんです。付け加えれば、「人生の、本当の楽しみ」とは何だろうと思います。

■孤独のグルメ■

私は、松重豊まつしげゆたかさん主演の「孤独のグルメ」という番組をよく観ます。これは原作は漫画ですが、主人公はとにかくよく食べます。各地の食堂やレストランに一人で入り、黙々と、しかし、内面でいろいろと呟きながらご飯を食べます。松重さんもよく食べます。

だから一人の男が夢中になつてご飯を食べている。その姿を撮影し、放映しているというだけの番組です。馬鹿らしいと言えば馬鹿らしいのですが、それが、どういうわけか観てしまうのです。やはり、老年期に入り、何に楽しみを感じるかと言えば、やはり「食欲」なのかと思います。「最後は食欲だね」とは、よ

く耳にする言葉です。確かに美味しいものを食べることは「楽しみ」の一つであります。ただ、「食欲」が悲しいことは、満腹になると、それでお仕舞いになってしまうことです。

■仏法の味を愛樂する■

まあそれはそれとして、私は、やはり、「楽しみ」の最終着地点は「仏法ぶつぽう」なのではないかと思っています。それを教えてくれる言葉が、冒頭の「愛樂あいぎょう仏法味ぶつぽうみ」です。これは天親菩薩てんしんぼさつの『浄土論』の中にあるポエムです。「仏法の味を愛樂する」と読みます。

仏法は「お経」ですが、「言葉」で書かれていますから、「言葉」の「意味」を味わうということなんです。しかし、これはよく聞くことですが、「真宗の法話は難しい」と。確かに、凡夫ぼんぷには分からないことを聞くのですから、難しいのは当たり前です。でも単に難しいというだけのものでもないのです。

難しいけれども、どこかで、それに領うなずいている自分があるのです。それは自分自身の「堯いのかち」に深く関係しているからではないかと思います。

■チコちゃんに叱られる■

世間のことは、分かってしまえば、それで知的欲求は満たされ、それ以上求めることはしません。NHKの「チコちゃんに叱られる」という番組があります。これは普段、当たり前になっていて、何の疑問にも感じないことをあえて問いかけ、出演者がそれに答えられないと、チコちゃんから、「ボーツと生きてんじやねーよ！」とえらい剣幕けんぼくで叱られるという趣向です。これなども、答えを聞いて、「ああそうなんだ」と分かった途端に、知的欲求は

満たされ、それでお仕舞いです。そのときは、へえーっと思うのですが、そんなことも、やがて忘れてしまいます。

■ 仏法の旨味 ■

ただ仏法は、聞いても聞いても、知的満足感を与えてくれませんが、たましいの満足感を与えてくれるのです。仏法は、難しいし、聞いても聞いても分かりませんが、それでも聞いていると、この分からないということから旨味が滲み出してくるのです。この旨味を味わってきたのが、「真宗門徒」と呼ばれるひとびとのだと思えます。

もし「簡単に分かってしまう教え」であれば、ひとはすぐに飽きてしまうでしょう。「答え」が分かってしまえば、もはや知的好奇心はなくなります。「ああ、そんなことならもう知ってるよ」と、バカにすらするでしょう。ですから、仏法は、ひとに決して飽きられないように、旨味を提供し続けてきたのです。変な譬えですが、舐めても舐めても、決して溶けてなくなならない「甘露の飴」を与え続けてきたのです。

■ 料理は舌が大事 ■

あるとき、お寿司屋さんのカウンター越しにいる大将に向かって、「大将の作る料理は、料理の域を超えている。まさに芸術品だね」と絶賛したことがあります。すると大将は、すかさず、「いやいや、それは武田さんの舌がいいからでしょう」と返してきたのです。これには一本取られました。

確かに、どんなに美味しい料理でも、それを味わう舌がなければ、それを「美味しい」と感じることはありません。つまり、自分の料理を「美味しい」と感じる舌があつてこそ、その旨味を味わう

ことができるのだと大将は言いたかったのです。

■ 仏法を味わう舌 ■

仏法を味わう舌とは、「みすみす死ぬのに、何で生きねばならないのか」と問う舌です。老人であれば、もうじき死ぬことは、誰でも分かっています。それでも布団の中で目が覚めれば、また次の日も生きねばなりません。「また、朝が来たのか」と呟きます。しかし、「死ぬに死ねず、生きるに生きられず」、このギリギリのところ立たされているのです。

そのギリギリのところ、思いつき開き直って、大の字になって寝てみましょう。「焼くでも煮るでも勝手にせい！」と開き直って、仏法の前に身を投げ出してみればよいのです。

そうすれば、もう「分かりやすい話」などに見向くこともなくなりません。「難しく、分からない」ことを不快に感じていた自分が、やがて、これに心地よさすら感じるのです。

■ 「分からないこと」と「本当に分からないこと」 ■

捨て身になってみれば、「分からないこと」だらけです。何で自分は他の生き物ではなく、人間に生まれたのか。なぜ男であつて女ではなかったのか。なぜ江戸時代でなく、現代に生まれたのか。そうやって「甦」に目を向ければ、「分からないこと」だらけです。

ただ、「分からないこと」では満足できないのが人間です。この「分からないこと」が、やがて熟成され、「本当に分からないこと」にならなければ満たされません。「本当に分からないこと」に満たされると、人間から「死」が消滅するのです。いままで「分かっていた死」が消えてなくなります。この「本当に」という言葉がヒントになるのです。どうぞお大事に。

己おのれの真宗で死ぬるか？

「ほんとうの私を生きていく5」

鎌田 里子（東京都小平市）

今年、母の十三回忌の年だ。私が因速寺さんに通うようになって、十一年目になる。最愛の母の葬儀のとき、うちの宗派が「真宗大谷派しんしゅうおおたには」であることを知ったので、それまでは、仏教の「ぶ」の字も知らなかった。宗教とはほど遠い生活で、お手次寺てつきでらも、もちろん、なかった。葬儀屋さんが派遣してくれた「お東のお坊さん」に葬儀をしてもらった。真宗のことも、親鸞のこともまったく知らないまま、母を送り出してしまった。こんな事ではないのか！葬儀の間、私は母の遺影を見つめながら、「仏教の勉強するから！親鸞のことを学ぶから！」とこころの中で叫んでいた。

仏教の本を読んだがよく分からない。真宗大谷派の本山は、東本願寺であることは分かった。東本願寺のホームページから、東京には真宗会館しんしゅうかいかんというものがあることを知った。そこで、親鸞講座なるものが開かれていることを知り、それは池袋でやっていた。『歎異抄たんじしやう』とは何なのかも知らずに申し込み、それが、武田先生との出会いとなった。全八回、毎月一度の講座を楽しみに、ただ黙って通った。講座が終了した後、これから、私はどうしたら

いいんだ：と途方にくれた。講座中に配布された『よびごえ』という寺報を見ると、武田先生という講師は、「因速寺」という所に行けば、会えるのか？次へ繋ぐために、勇気を出して、私は講座の休憩中に、直接、先生へお声をかけさせていただいた。すると、先生は「連絡しようだい」と名刺をくださった。翌日、私はすぐにメールを出し、因速寺さんへ直接伺う約束を取り付けたのだ。それが、二〇十五年五月。私が観光でもなく、お寺を訪ねることになった最初である。

その五ヶ月後、二〇十五年十月の私の誕生日に、因速寺さんで、「ひとり帰敬式ききようしき」を受式した。先生から、「弥約みやく」という法名をいただき、お釈迦様の弟子となった。『歎異抄』（第十一条）の「誓願せいがんの不思議によりて、たもちやすく、となえやすき、名号みまごうを案じいだしたまいて、この名字みまじをとえんものを、むかえとらんと、御約束おんやくそくあることなれば」から、阿弥陀さんの「弥」と御約束の「約」をいただいた。娑婆での誕生日は、新しく仏弟子「弥約」となって生きる「ほんとうの誕生日」となったのである。

それからの私は、先生のご法話をお寺で聴聞するようになり、因速寺さんの様々な行事にも参加するようになった。報恩講、永代経、ご命日の集い、写経、ブツデイサロン、仏具のお磨き等々。そして、三年前の二〇一三年五月には、因速寺さんから「世話人」を委嘱された。仏教の「ぶ」の字も知らなかった私が、今では、仏法最優先の生活をしている。

因速寺さんに通うようになって、十年たった昨年、私は一世一代の大仕事をした。それは、「墓じまい」！！鎌田家のお墓は、宗旨問わずの霊園で、埼玉県の所沢にあり、両親が生前から購入

していた。母が亡くなり、その三年半後に、父が亡くなり、共に霊園に埋葬した。しかし、私は独身で後継がないため、そのお墓には入れない。いつか、「墓じまい」をしなければならなかった。そして、私自身の往く場所も決めなければならぬ。それをいつやるのか？と、ずっと、ここに引っかかり、先延ばしにしている。何も始まらない。「真宗」に出会い、因速寺さんに通って十年。とうとう決断した。因速寺さんにある「みんなのお墓・帰西廟きさいびやう」に、両親のお骨を移そう。そして、私も入る予約をしよう。そう決めて、半年かけて、霊園から因速寺さんの「帰西廟」へお骨のお引越しをした。

まず、霊園の事務所で、墓じまいの手続きをした。霊園に「墓所返還届」を提出し、「改葬許可申請書」に証明をもらい、所沢市役所に提出。そして、「改葬許可証」を受領し、「埋葬許可証」と併せて、「遺骨」を持って、因速寺さんへ行く。それと、同時に、霊園の墓所解体工事も行わなければならないのだ。建てたお墓は解体し、更地にして、返還しなければならないのだ。一度、両親のお骨を納骨したのだから、再度、取り出すための「出骨料」もかかる。お骨をお墓に入れたり、出したりするだけでも、お金はかかるのだ。

「帰西廟」の墓石に両親と私の法名・俗名の字彫りを石材店にお願いした。家族三人の名前が並んで彫られている。石材店のひとは、「今度は納骨したら、もう二度と骨は回収できないからね。大丈夫ですか？」と聞かれた。「帰西廟」への納骨は、骨壺から骨を全部あけるのだ。私の決意を再確認された感じがして、ドキッとした。私はまだ生きているので、墓石の法名の「弥約」

は赤字になっている。亡くなると、白字になるのだ。実際に見ると、実感が湧いてくるものだ。

次にお骨の引き取りだ。満開の桜の中、霊園から、お骨を二つ、車に乗せて、再び自宅へ両親を連れて帰ってきた。何だか、不思議な感じがした。二人を乗せた車の運転は、いつも以上に慎重になった。今度は因速寺さんに連れて行かなければならない。都心への運転は自信がないので、電車で、一つずつ運ぶことにした。骨壺はかなり重い。父は、4・6 kg。母は4・0 kgだった。骨壺の重さは、両親の人生の重さだ。今、私が通っている因速寺さんへの道のりは、電車と徒歩で、約二時間。両親亡き後、私を支えてくれた因速寺さんまでの道のりは、「ほんとうの私を生きていく」人生そのもの！その私の人生を両親にも見せたい。見てもらいたい！！と思いつつながら、骨壺を運んだ。

道中の二時間は、とても大変だった。重い！でも絶対に落とせない！点滅の青信号でも、いつもは走るけれど、今日は走れない。駅の階段も大変。全身に力を入れて、緊張しながら、骨壺を抱え、一步一步ゆっくり歩いた。電車の中でも、まさか、骨壺を抱えて乗っているなんて、誰も気づかないよね…と、思わず苦笑してしまった。とりあえず、無事に、両親を因速寺さんに連れて行くことができ、ホッとした。両親の人生を、命をかけて、運んだ二日間だった。

二〇二五年五月二十八日。両親の「帰西廟・納骨永代供養」を行った。参列者は私ひとり。「帰西廟」は中央の石が外れるようになっていて、そこから、骨を中に入れる。中を覗くと、骨でいっぱいだった。骨壺の両親の骨は、その中へ散骨され、みんなと

一緒になった。私の手元から両親を解放できたような、やつと、阿弥陀さんの国・お浄土に両親をお返しすることができたような気がした。私もほんの少し遅れて、ここに入る。地球は丸ごと、一つのお墓だ。

因速寺さんは、私にとっての「本山」だ。因速寺さんに通い続けることが、私の生活の基準。「己の真宗で死ぬるか？」これは、武田先生の師匠である、西田眞因先生の言葉である。この言葉に問い続けられながら、これからも、因速寺さんに通う。一回一回が初事であり、最後である。

南無阿弥陀仏 〈釈尼弥約〉

■ご両親の「死」がきっかけで、〈真・宗〉と縁を結んだ鎌田さん。若い頃、私は誰もがみんな、「死別」経験を縁にして〈真・宗〉と縁を結ぶものだと思いついていたのです。最愛の家族を亡くされたのだから、皆さん、誰もが当然、〈真・宗〉を聴聞するようになるのだと思っていたのです。ところが、それは夢を見ていただけでした。現実には、「死別」も縁になる場合があるけれども縁にならないことがほとんどです。ですから、〈真・宗〉のご縁は、人間が決めることのできない希有なものなのです。文章のテーマは「己の真宗で死ぬるか？」という衝撃的な問いかけです。これは師が講題にされた言葉ですが、これは先生が聴衆に呼びかけるテーマではないと言われました。むしろ先生自身が、阿弥陀さんから、「お前の真宗の頂き方で死んでいけるのか？」と問われたのだと話されました。そう言えば、この世を生きるのは〈絶界の一人〉です。もはや、釈迦にも親鸞にも依存できない〈一人〉のところ以外に、信仰的自律はないのです。

住職

「仏法聞き難し」 (その3)

加藤 伸吾 (神奈川県川崎市・

東京真宗同朋の会)

前回は前々回の続きを書き、その1・2で終わらせるつもりだったが、誠にこの世のあらゆることを予測することはできない。よりによって、坊守様ご還浄について記事を書くことになろうとは思わなかった。そのうえ、その前々回からはもう一年が経過しようとしている。なんとということだろうか。南無阿弥陀仏。

今回はその前々回の続きとなる。二〇一四年度を本山のほど近くで過ごし、本山の阿弥陀堂門横にかかっていた「いま、いのちがあなたを生きている」ということばと遭遇するご縁を得た。その後今の職場である大学に就職することとなるが、その職場の学祖は、都内にある本願寺派のとある大坊に眠っている。その寺院の付属幼稚園は、私の口から今生で初めてのお念仏が出たであろう場所でもあった。しかし、まだ「聞法」の「も」の字も知らない。

* * *

職場の決まった二〇一五年以降は、ようやく公私共に落ち着くかと思えば、そんなわけにはいかなかった。その頃さまざまご縁が重なり、あるお芝居をされていた方と、少なくとも名目上は法的な結婚を前提とした不思議な同居生活が始まるうとしていたのだが、いつしか私の方が名目から大きく外れてしまった。その

まま先方もそうなってくればよかったのだが、実はその方が、大河ドラマ常連の某既婚の俳優氏の長年の愛人であること、さらになぜ同居が「名目上」に過ぎなかったのかが発覚する。つまり、その方はその愛人状態から脱出するために、私との同居生活をいわずに利用したに過ぎなかったのだ。そこから私の精神状態は、確実に迷走状態に陥った。

今でこそこの時のことを「あれも一つの機縁」などとうそぶくこともできるが、当時はそれどころではなかった。恋愛などというもので自分がこれほど動揺し落ち込むとはまさか思っていなかった。食欲もあり睡眠もとっているのだが、なぜかどんどん痩せていった。変わらず同居はしているのだが、生活時間帯もずれる中、全くやり取りがない状況が続いた。その方の部屋に行つてノックをしても出てくれない。芝居の稽古で疲れ果てて寝ていたそうである。そんな中私は何を思ったのか、その部屋のドアに向かって合掌礼拝してしまつたのだ。

その奇妙な同居生活は、結局短期間に終わった。長続きされても困つたことだろう。その方は去つたが、私の虚脱は残つた。「機縁」となぜ呼べるかといえ、今に至る「自己とは何ぞや」(清沢満之師)という問いを持つに至つたプロセスが始まつたのが、この時だったからであつた。当時は「必死で血眼になつて心の平和を求めてさまよう」という実に矛盾したことをしていた。その結果出会つたものが二つあり、そのいずれも今に至っている。一つは、とある傾聴法。形式は依存症者とその家族の自助グループのようなもので、数人程度で集まつてそれぞれ好きなことを話すのだが、その話に対して、聴く側は、話した側から求められな

い限り一切コメントできないというもの。無論第三者に話してもいけない。ただメインは話すことにあるのではなく傾聴で、コメントもできない以上その人の話を聞いて何を思うかは聴く側に任されている。そこで、その集まりはいかに心の平和を手放さずに聴けるかの訓練の場となるのである。その傾聴法と出会つてから十年以上が経過しているが、今その傾聴法を標榜するNPO法人の共同代表を拝命している。それでも、心の平和を維持しながらぼぼ見ず知らずの人々の生々しい話を聴くのは、大変に難しい。そしてもう一つが、仏教であつた。幼稚園と中高でお念仏に出会つているのだから、ここで「本願に帰す」(『教行信証』より。『真宗聖典』第二版四七四頁)ともなれば話としては美しいのだが、なかなかそうもいかない。大学の頃辺りから私は集中力のコントロールが効かないことに悩んでいたため、その解決も狙いつつ、文京区にある臨濟宗の寺院に参禅することにしたのであつた。

今ではもう坐禅は全く実践していないが、この時の私の「決断」も、今思えば「阿弥陀さんのお手回し」であつたに違いない。なぜなら、他人に言われるのではなく、自分の足で寺院の敷居を跨ぐということをしたのは、人生で初めてだったからである。

しかし、坐禅しても一向に集中力は改善しなかつた。ある時は全く何もできなくなつたかと思えば、ある時突然仕事を始めて、締め切りの近い長い原稿を一気に仕上げるというような仕事の仕方だつた。のちにこれが、いわゆる神経発達症(発達障害)の一つであり、根治は不可能ではないが非常に難しい、注意欠陥障害に非常に近似した症状であることが分かる。

いきおい坐禅からは離れていくのだが、お寺にお参りすることへの心理的ハードルは、ぐっと下がったのであった。

また、臨済宗ではなく曹洞宗だが、恐山菩提寺の院代を本稿執筆現在でも務めている南直哉師を講師として、赤坂の豊川稲荷東京別院（愛知の本山以下、実は神道ではなく曹洞宗の立派な寺院だそうです）で開かれていた仏教講座に、ほんの一時期だけが通っていたのも、確かこの頃だったと思う。そしてそこで生まれて初めて、曇鸞どんらんという名前を目にすることとなった。南師は、私が出席していた際には、鎌倉新仏教、特に親鸞聖人を取り上げておられた。いうなれば「偶然」である。当然ながら、「信心」といっても真宗の脈絡ではない、我々一人一人を主語とする信心のお話を熱心にされていた。南師は「人は自分がどこまで信心を持っているかを試してみたくなくなってしまふものだ」と話されていた。

これが親鸞聖人に当てはまるかどうかは、今の私には分からない。しかし、その「信心」の脈絡で南師は、親鸞聖人の「信心」の強さの秘密は、曇鸞大師への傾倒にあるのではないか、ということをかなり強調されていた記憶がある。今の私は、七高僧しちこうそうのうちの方々に最も興味を覚えるかと問われれば、今のところ曇鸞大師（ちなみにその次に善導ぜんどう大師）、と答えるであろう。

ここでついでに宣伝させていただくと、受講している親鸞仏教オンライン学会 (<https://shinran.online/>) というものがある。企画の方々が知恵と気力体力を振り絞って運営されており、私含め多くの受講者を得ているのだが、その「課外活動」として、受講者有志が月一回集まって、龍樹菩薩りゅうじゆぼさつの『十住毘婆沙論』

「易行品いぎようほん」から始めて七祖聖教を通して訳しながら読むという「輪読部」の活動がある。毎回必ず何がしかの発見があって、私にとっては大変ありがたい場となっているが、そこで今読んでいるのが、ちょうど曇鸞大師『浄土論註』である。「正課活動」は毎週火曜日夜7時半から1時間半、ほぼ52週間休みなく講義が展開されている。ご興味がおありの方は、ぜひ<http://www.shinran.org/>サイトを訪れてみてほしい。

さて私の与太話よたばなしに戻ると、このように参禅したり仏教講座に出席したり、その前などは真宗本廟の標語にまで出会っていないながらも、何か今ひとつ手応えのようなものが感じられない日々が続いたのであった。

そんな中、ふとしたひょうしに聴くようになったのは、仏法ではなく、仏教音楽である声明しょうみょうであった。元々は、禅宗系諸派の所依の經典である『首楞嚴經』の一部を歌詞とする、黛敏郎のいわば「カップリング」が薬師寺の声明であった。涅槃交響曲も相当気に入ってヘヴィー・ローテーションに入ってしまったが、それは薬師寺声明も同様であった。ここから声明一般への興味を持つに至る。その後色々音源を入手する中で、高野山真言宗の声明の一派・南山進流によるCD、特に『理趣經』の読経部分を好んでリピートするようになった。好きも高じて、ランニングやエアロバイクなどリズムカルな運動をする際に、不可欠なBGMとなった。今思えば、なんと失礼な聴き方かとも思わないでもないが、無論当時はそんなことに気づいていない。

当時はすっかりYouTubeも広まっており、CDで気に入った音

楽をYouTubeで探してみると、思わずライブ映像などに出会うこともある。この『理趣経』読経部分の映像はないものか、と探してみた。

…あった。しかしそれは、いわゆる伝統的な声明とは全く異なるものだった。称して、「テクノ法要」という。

これは、福井にある本願寺派の照恩寺しょうおんじのご住職で、本職のテクノDJでもある朝倉行宣師による、声明を現代の電子音楽（その一部を「テクノ techno」と称する）でアレンジした音楽によって、朝倉師を導師として法要を営むものである。『三奉請さんぶじょう』などのお西の伽陀に始まり、正信偈念仏和讃、最後はもちろん恩徳讃である。

…なんだこれは…。めちゃくちゃカッコいいではないか！！すぐに朝倉師によるテクノ法要の動画は全て見尽くしてしまったが、その中に阿弥陀経のテクノ法要があつて、その特に二〇一六年版が最高であつた。ご興味のある向きは、ぜひ「阿弥陀経2016」テクノ法要」と入れて探してみしてほしい。音楽、いや声明だけではない。照恩寺のご本尊にプロジェクトマッピングなどをほどこした映像の上にさらに様々なエフェクトをかけて、目眩く高速の、しかしそれは確実に「法要」であるものが展開されている。

以降、私のトレーニングBGMのバリエーションに、この『阿弥陀経2016』が加わった。

今これを書きながらも思う。二河白道の譬たとえでいうなら、これだけ釈尊に「行け！」と、そして阿弥陀様に「来たれ！」と、いわば煽られているようなものである。しかし、そもそもそこに道があることに、これでもまだ気づいていない。

そこに気づくためには、まだふた捻りほどが必要であつた。

* * *

その一捻り目は持病であつた。心臓ではあるが、弁膜症という大変ありふれたもので、開胸手術とはいえず後不良の確率1%に満たない。確立された手法があり、それができる執刀医を選べば良い。私の身にそれがあつたのは、二十六歳で不本意ながら進学を諦めて一般営利企業に就職した時の健康診断だつた。しかし、「来年はそろそろ手術ですかね」と言われつつ、実際に手術したのはそれから二十年近く経過した頃だつた。当時、今の職場である大学からスペインに留学させてやるのお達しを頂戴した直後であつた。主治医と話して、手術して「綺麗な体で」（これも不遜な言い方）スペインに行こうとなつた。しかも、最新の術式を適応してくれるという。喜んで受けた。

しかし、兎角この身はままならぬ。百パーセント成功した手術後に、不整脈が合併症で出現した。これが恐ろしい。心拍が変拍子になってしまふ。四連符↓休止↓三連符↓五連符…といった具合。先々週切り裂いて縫ったばかり、という心臓ゆえ、そんなリズムでは縫い口が弾けてしまうのでは、と、生きた心地がしなかつた。不整脈の根治を期待できるのは、心筋焼灼術しんきんしょうやくじゆつ、カテーテルアブレーションである。しかしその適応にはならなかつた。電氣的除細動でんきてきじよさいどう、つまりAEDでやるあの施術で、治ってしまったからである。そのままスペインに行くことになつた。しかしそこで不整脈が再発する。アブレーションをやってもらう予定だつた先生と電話で連絡を取り、一時帰国して手術は無事成功。しかし、そこでまた一つ事件が起きた。左目の網膜にある毛細血管に血栓

か脂肪か何かが詰まった。それで左目の一部視野が欠損することとなった。人生初めての救急車。それでもなんとか失明は免れ、スペインに帰った。それなりに楽しく、充実した生活をしていたが、ここで立て続けにトラブルが起きた。まずは、弁膜症の再発。やはり血栓が詰まって肺静脈に溜まり、その影響で再建した心臓弁が破壊された。三歩歩いただけで息が上がってしまう。スペインでも救急車を呼ぶ羽目になった。モータースポーツが盛んなスペインならではの？の、爆速救急車は別の意味で生命の危機を感じた。それでもスペインは、心臓移植手術の症例数が世界一の国である。

当然他の心臓手術はお手のものであった。入院は1ヶ月かかったし、麻酔の量も半端なものではなく、術後せん妄のためここではさすがに書けないような「奇行」をいくつもしてしまった。

しかし真の恐怖はその後にやってきたのであった。コロナ禍である。私がマドリードの病院を退院した翌週から、毎日のデス・カウントが始まった。一日三桁の人々が亡くなっていった。自宅からは出られず、それでも通院のたびに病院に行かねばならず、家にいるのも外に出るのも、本当に不安で心細く、恐ろしかった。スペインでは初めてのあからさまなアジア人差別にあったのも、この時だった。這々の体で帰国したら、次に待っていたのは二捨り目、父の往生であった。

母はなんと、今でいう直葬をするという。私はせめてお経を、できれば阿弥陀経をあげたかった。しかし、時間の猶予は与えられず、なぜか般若心経をあげた。そこで知ることになる、浄土真宗では般若心経をあげない、なぜなら真宗は「他力の教え」だけ

らだ、と。そこで初めて、浄土三部経、そして正信偈を読むご縁がついにやってきた。当時は、自分の出身幼稚園もテクノ法要も、そして勤務先の学祖が眠る寺もお西だったから、お西のやり方で、そして築地本願寺からご本尊をお迎えして、勤行を始めた。しかし、私はスペイン民主主義の研究者でもあるので、大谷派近代教育学、そして日本の戦後民主主義の大谷派版、ともいべき同朋会運動にも多大な興味を惹かれていた。

そんな中、「…これが仏教なのだろうか？」という疑問を抱き始めたのだが、そこで出会ったのが、児玉暁洋先生の『正信偈響流』であった。特に児玉先生の文章は、「還来生死輪転家」からの四句を、四聖諦を示したものと解釈されておられた。ここに仏教としての真宗が開顕されている、との仰せを賜ったのであった。「…やはりお東なのだな」、と肚は決まった。大谷派の先生方のご法座でお聴聞する生活が、ようやく与えられた。その後、武田定光住職はじめ、多くは東京にご縁のある様々な布教師の方々からの仰せを蒙って、今に至る。毎日の勤行と、週末の聞法の日々が始まった。天女さんの袖が擦り切れる…とまではいかないが、ここまでずいぶん時間がかかったものだなあと思う。

しかし、私は本当に「法を聞いている」のだろうか。まだお西のお勤めをしていた頃、本願寺派のとある布教師の方から勤行本にもらったサインには「仏智不思議」とあった。大谷派に転じてからは、昨年お浄土に還られた池田勇諦先生から、やはりサインで「縁を生きる」という仰せを頂戴した。そして、本山で目にした「いま、いのちがあなたを生きている」という法語。「仏智不思議」といただきつつ、学者を生業とする業縁を持つ私は、それ

らのお言葉をまずは頭で解釈せざるを得ないこの身の事実がある。毛穴から入ってきているのだろうか。平生のお勤めは、それなりに勤まっているのだが。それが分からないまま、六月に得度考査のご縁を得た。幸いにして、来たる九月にはツルツル頭で度牒をいただく手筈となっている。東京真宗同朋の会とのご縁もいただいた。そういう立場ならではの聞法のご縁が与えられたことは、素直に嬉しい。

ここには詳しく書けなかったが、一番身近な人たちを傷つけながらここまでできてしまった、こんな私でも救われるのだろうか。

「自己とは何ぞや」の答えを日々折々突きつけられ、受け入れられたり受け入れられなかったり、そもそも自分で受け入れようとしてしまう、お任せしきれないこの身の上で、「実験」（清沢満之師）をさせてもらっている。（了）

■「ひとに歴史あり」、「求道に遍歴あり」とはまさにこのことです。自分がどういう遍歴を経るかは、そのときの自分にはまったく知らされていません。ただ、自分の過去を振り返ってみただけ、それが立ち現れてくるのです。親鸞も29歳で比叡山を下りたときには、自分が何者か、何を目指しているのかが分かっています。 「水よく石を穿つ」と言う言葉があるように、この遍歴を経ることで、初めて、水に穿たれた自己という石の核心が現れてきます。この剥き出しの自己が現れて来るまで穿たれ続けなければなりません。別の言い方をすれば、自分の知っている自分などは、「本当の自分」ではないのです。やがて、自分の知っている自分が1%、自分の知らない自分が99%にひっくり返され、ようやく「自分」に落ち着くのです。親鸞も、「自分」などはどこにも

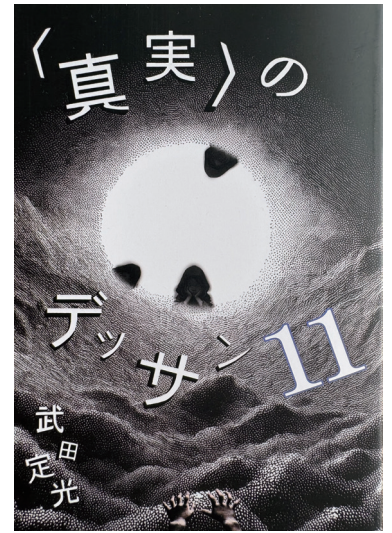
『夏の日の思い出』



ない。すべてが阿弥陀さんからの促しだとひっくり返されました。そして「世界」と「自分」が同化したのでしょうか。

住職

New!
住職新刊本発売



『〈真実〉の Dessert 11』
 実費負担金 500円

◇ **写経の会** ◇

毎月1回 午後1時半～4時頃まで

開催日：7月8日(水) 8月はお休み 9月9日(水)

10月7日(水)

教材 .. 正信偈、仏説阿弥陀經、仏説無量壽經 (上下)

冥加志 .. 初回は三千元 (教材費込み) 二回目以降五百円

一時間程写経に集中し、その後は本堂で勤行(おつとめ)をします。お菓子とお茶を飲みながらワイワイ座談をする会です。写経のみの参加でも構いません。

◇ **ブツデイサロン** ◇ (輪読会)

一冊の本を皆で輪読した後、お酒と肴と仏法を味わいながら、語りつ会です。参加されるかたは職種も様々、住所も様々、何も強制されることはありません。どなたでも参加自由です。

開催日：7月26日(日) 8月30日(日) 9月27日(日)

10月はお休み

冥加志：お一人千円 ※遅刻、早退自由です。

〈因速寺護法会決算のご報告〉

令和七年度決算

会費収入	11,671	152円
(前年度繰り越し金を含む総収入)	15,063	738円
総支出	12,620	086円
次年度へ繰り越し	2,443	652円
令和八年三月三十一日現在		

※詳細をご希望の方は、寺務所にお尋ね下さい。

雑言雑語

ある朝夢を見た。それは友達達の誕生日に武田家家族を含め、私が手作り料理を振舞うという夢だった。私が段取りを考えて料理を進めていると、父親が勝手に大量の冷凍即席ラーメンを作って、来ていた子供達に食べさせようとしていた。それがまた麵はのびのびで、とても食べられたものではなかった。私の料理の段取りも無視して作ったラーメンを一口食べて「こんなまずいラーメン食べるか！」と吐き捨てた。父親はしよんぼりして本堂の母親の骨の前にお供えしていた。私も腹が立ち御内仏の母親の遺影に愚痴を吐いた。すると母親の顔が悲しそうに苦笑いを浮かべ、「あんま、バを怒らないであげてね」と喋りかけてきたのだ。あまりに懐かしい声と顔を見て、思わず「おかん！会いてえよ」と涙を流したところ、目が覚めた。私は母親が亡くなった事の中で消化したと思っていたが、まさかこんなにもリアルな夢を見るとは驚いた。そして「十億の人に十億の母もあるも、我が母にまさる母なし」という言葉を思い出した。お葬儀や「法事でお母さんを亡くされた方々の気持ちをしみじみ感じるようになった。母親という存在はとても大きい。そしていのお母さんは阿弥陀さんだったと教えられて、育ててくれた母親は阿弥陀さんの用事をするために私の母親となって現れてくれたのだ。阿弥陀となった母親との毎日の日暮らし日記でした。 釋定志

表紙画題



『よびいえ』一四四号

『ガクアジサイ』

佐々木瑞穂さん

発行所 因速寺 (真宗大谷派 本山 東本願寺)
 〒136-0074 東京都江東区東砂1-4-10
 理(03) 3644-0986 FAX(03)3648-4391
 Email info@insokuji.com
 HP https://insokuji.com
 編集／発行 武田 定光 Takeda Jyoutoku
 発行日 二〇二六(令和八)年七月十日
 Copyright 2026 INSOKU-JI Printed in Japan